

《最終講義》

ハンニバルに恋して

楠 田 直 樹

2020(令和2)年1月30日

はじめに

まず、この場を借りて私に関わり、支え助けてくださった総ての方々に心から感謝します。この年齢になってやっとわかったことは、一人では生きていけないということです。まだまだ、理解しきれてはいませんが、ほんの少しだけわかってきたように思います。

さて、この場では「ハンニバルに恋して」というタイトルで、私の半生の表と裏の両面を話すことは時間の関係上、いささか難しいところです。それで、ここでは、公式な表側の話をしておきたいと思います。裏側の人間の本質に関わる話は、何れ時を改めて、どこかでじっくりと話すことができれば、と考えています。

今回は限られた時間の中で、かいつまんでする話なので、少々わかりにくいところがあるかもしれませんが、そこはこの話の後で聞きに来るなりしていただければ、嬉しく思います。では、「取っ掛かり」、「出会い」、「やっとハンニバル」という順序で数分ずつ話すことが出来れば、と考えています。

1. 取っ掛かり

私はこのハンニバルという人物に、中学一年のときに出会い興味を持ちました。といっても、私はゲイでもホモでもありません。例えば、ダンテ・アリギエーリ Dante Alighieri 以上と称せられる、あのルネサンス人フラン

チェスコ・ペトラルカ Francesco Petrarca の最愛の人物は、ユリウス・カエサル Julius Caesar の政敵であったマルクス・トゥリウス・キケロー Marcus Tullius Cicero でした。ペトラルカは時代を超えてキケローに手紙をしたためます。彼が発見したキケローの文章があまりにも愚痴の多いものだったので、それに意見するような形で書き綴ります^①。時代を超えて、男が男に恋することもあるのが理解できると思います。

中学一年当時、中央公論社から『世界の歴史』というシリーズが刊行されました。その第二巻『ギリシアとローマ』という書物は、村川堅太郎先生がギリシアを、秀村欣二先生がローマを担当して書かれました^②。そのローマの中で、ハンニバル Hannibal という人物が登場してきます。その書物を読んで、ローマに敗北を喫した将軍でありながら、地中海世界の三大将軍の一人にあげられていました。あと二人はアレクサンドロス Alexandros 大王とユリウス・カエサルです。この二人は常勝ですが、ハンニバルは最終的に敗北を喫したにもかかわらず、なぜそれほどまでに考慮されるのかという疑問が生じてきました。のちにわかった答えは簡単すぎるものでした。それほど、その当時活躍した人物がいなかったということが最大の理由でした。その書物を勧めてくれたのが母親でした。

それで、一生懸命に調べようとはしましたが、今から半世紀以上も前のことですし、まだ中学一年です。なかなかこれという答えまで至りませんでした。さらに、大学生になっても、日本語で書かれた関係書籍はほとんど皆無でした。調べても調べても表面的なことしか見えてきませんでした。

そして大学を選択するときに、ハンニバルを調べることのできる大学を探しました。ただ調べても東京に行くという選択肢は私の頭の中にはありませんでした。親戚もあって、四国から近くて安心できるので、できるだけ関西で、という考えしかありませんでした。その当時は、このような研究ができるのは著名な国立大学か、キリスト教系の大学でした。そして結局は滑り止めの大学にしか合格しませんでした。でも大事なことは大学院まであって、研究が続けられるという環境でした。大学の図書館に行っても、通史的なものばかりで、なかなか本質に迫ってくるような書物には出会えませんでした。そのハンニバルという人物を調べるのがしだいにライフワークになっていきました。その頃覚えたての英単語 Carthage、Punic Wars、Ancient Rome

などという専門的な言葉を基にして、図書館で書物を探していました。そして大学の三年の頃から、大阪の大きな書店に日参するようになり、日本語ではだめだということがわかり、洋書を探し、買い漁るようになりました。英語の書物は言うに及ばず、フランス語、ドイツ語、果てはイタリア語の書物に至るまで探し回りました。そうすると、さまざまな書物に出会い、ハンニバルへの視野がしだいに広がっていきました。しかし、すぐさま直接的にハンニバルに至るには、まだまだ地中海の歴史に対する造詣が深くはありませんでした。それで、古代地中海世界をさまざまな角度から調べていくことが大切だと思い始めました。ハンニバルに行き着くために、どうしても通過しなければならない儀礼のようなものでした。

大学の三年を過ぎる頃から、自らが勉強しなければならない研究がうつつらと見え始めてきました。カルタゴ研究をするためには、ローマを知らなければ、というかなり単純なものでしたが、ハンニバルについて書かれていた、その当時の史料はほとんどがローマ側のものでしたから、そうする必要がありました⁽³⁾。そこで登場してきた人物が大スキピオ Scipio Africanus です。その彼の養孫のスキピオ・アエミリアヌス Scipio Aemilianus に興味を持ちました⁽⁴⁾。それが学部の卒業論文「第三ポエニ戦争とカルタゴの崩壊—マッシニッサ、カトー、スキピオ・ナシカと第三ポエニ戦争」という形になりました⁽⁵⁾。それでも、なかなかハンニバルにまで至りません。歴史研究の想像を絶する奥深さに気持ちが萎えてくるようなときもたまにありましたが、気を取り直し小さな小さな一歩を踏み出していきました。

註 (1) 渡部友市、『イタリア・ルネサンス』、教育社歴史新書、1980年。

キケローに関しては、近年岩波書店から『キケロー選集』全16巻が刊行されました。

(2) その頃、さまざまな出版社から『世界の歴史』シリーズが出版されました。その掉尾を飾るように、岩波書店から『岩波講座 世界歴史』全31巻が刊行され始めたのが大学一年の頃でした。その全集は近年になって全29巻で新たな装いになって出版されました。

(3) そこで目にした史料には、Polybius、Livy、Diodorus Siculus、Appianus などあまり私の知らない名前が次々と出てきました。そ

の史料を渉獵することが当面の課題になっていきました。そこで、先輩諸氏などから教えていただいたのは、Loeb Classical Library（英語対訳）、Budé版（仏語対訳）、Teubner（原語表記）やOxford Classical Text（原語表記）などの原典を収めたシリーズでした。その中で、割合と手に入れやすかったのがLoeb Classical Libraryでした。

- (4) そのときに興味をそそったのが、Astin, A. E., *Scipio Aemilianus*, Oxford, 1967. でした。当時は第三ポエニ戦争を調べていたので、出版されたばかりのこの書物が自分の目に真新しく映っていたのを記憶しています。のちに、西洋史学という雑誌の第119号に、『P. Cornelius P. f. P. n. Scipio Africanus Aemilianus — 前147年のコンスル職までの経歴』という論考を掲載していただきました。
- (5) のちに、創価女子短期大学の紀要に、『カルタゴと天敵マシニッサ』1986年、第2号、『第三次ポエニ戦争と「脅威の釣合」論 — ローマ元老院内部の葛藤 —』1989年、第6号、『カルタゴの滅亡とスキューピオー・アエミリアーヌス』1989年、第7号に分冊して掲載しました。

2. 出会い

ともかく、大学に通い始めましたが、なかなかハンニバルには行き着きません。何のために大学まで来たのか、投げやりになったり、自問自答する日々でした。大学二年のときに、大阪の大きな書店で、フローベール Flaubert の『サラムボー Salammbô』という作品に出会います。フランス語で、あとになって知ったのですが、コナール Conard 版という由緒あるものでした。それを冬休みの間に辞書を片手に読みました。少しでもハンニバルに近づこうとしていました。因みに、フローベールは『ボヴァリー夫人 Madame Bovary』という小説を執筆したあと、パリ文壇界でスキャンダルに巻き込まれ、筆を折る覚悟をしていたときに、彼自身は歴史を題材にしたものを描きたかったんだと、気を取り直して、この作品を書き上げます。そのストーリーは、第一ポエニ戦争が終結したあとの傭兵たちがカルタゴで反乱を起こしたことを題材にした歴史小説です。

このカルタゴに関しては、無声映画時代にさまざまな映画が製作されました。『カビリア Cabiria』(1914年)はその代表的な作品で、カルタゴに関する数々のセットが制作費に糸目をつけず建設されるというものでした⁽⁶⁾。時代の流れに関しては、かなり異論はありますが、カルタゴが舞台というだけで納得させられるものでした。のちの無声映画時代の超大作『イントレランス Intolerance』に大きな影響を与えたことでも有名な映画です。日本では、1916年5月27日に帝国劇場で公開されています。ここには、古代地中海世界の三大美女の一人ソフォニスバ Sophonisba が登場します⁽⁷⁾。他愛のないストーリーですが、ハンニバルの故国カルタゴが舞台でした。

そんなときに、偶然出会った教授がのちのゼミの教授になるわけですが、大学二年の頃、文学部の校舎の廊下で「何を読んでいるの」と声をかけられました。その教授が**柘植一雄先生**です。そのときトウキョウダイデースの『戦史』の英語版 *Everyman's Library* を小脇に抱えていました。それを見て、「原語で読まないとねえ」と言われました。これが原語でないということに気づき、それから古代ギリシア語の勉強を始めました。最初は右も左もわからなかったのですが、岩波全書の『ギリシア語入門』から始めて、数ヶ月ギリシア語に没頭した結果、何とかわかるようになってきました⁽⁸⁾。そのときに助けてくれたのが二人の先輩でした。毎週一度三人でビザンツ史の原史料テオファネスを一頁ずつ読んでいくという作業でした。日本語はありません。最初の一、二ヶ月はその日のためにギリシア語を調べるだけで日々過ぎていきました。三ヶ月目くらいから少しずつギリシア語が辞書で引けるようになりました。ギリシア語日本語の辞書なんてない時代です。希英辞典 *Greek-English Lexicon* です。そのうえに、キリスト教華やかなりし時代ですから、教父学希英辞典 *Patristic Greek Lexicon* などを使用して理解を深めていきました。どちらの辞書もそれはそれは重たい辞書です⁽⁹⁾。でも、わかるようになってくると興味がどんどんと広がっていきました。

二人目は、**長谷川博隆先生**です。本当はその先生のゼミにいこうと思っていたのですが、急に転任してしまい、授業だけが残りました。その西洋史学特殊講義という授業で、大学まで来て初めてハンニバルの講義を聴くことになりました。その講義が後に清水書院から出版されました。今までの勉強ではだめだということがわかる、目から鱗が落ちる授業でした⁽¹⁰⁾。今でも記

憶しているのが、「ローマの歴史を勉強するのなら、少なくとも10ヶ国語は勉強しないと」という言葉でした。大学の三年から通常授業よりも語学との戦いが始まりました。英語は言うに及ばず、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、オランダ語など、当然ギリシア語とラテン語は個別に勉強していきました。それでも10ヶ国語にはなりません。卒業論文まではまさに語学との格闘でした。なんとか語学に格好をつけて、次の目標を探しました。それは留学です。でもまだ、海外に行くという踏ん切りはつきませんでした。それでもいつかは行かなければならないとは考えていました。それで、大学院博士課程の初年度の夏休みにヨーロッパを見学に出かけました。三週間ほどかけてギリシア、イタリア、スイス、スペイン、ドイツ、オランダ、イギリス、フランスという西ヨーロッパ各国を廻りました。そこでほぼイタリアに行こうと思うようになりましたが、まだ決定的ではありませんでした。当時は羽田から出発して、台北、香港、バンコク、デリー、カラチ、カイロを経て、やっとギリシアのアテネのヘレニコン国際空港に到着するという南回りの各駅停車のような便でした。ただ帰路はパリからアンカレジを経由して羽田というものでした。

日本における西洋古代史のエリートたちはドイツに留学しますが、彼らと同じようにしては勝てないと考えました。また、英語はある程度できるのが普通ですし、古代史研究の本場として残ったのはフランスかイタリアでした。北アフリカは元来フランスの植民地だったので、フランスも候補に残っていました。しかし、フランスの歴史研究は私にとっては若干癖のある方法だったので、結局イタリアが残りました。しかし、日本人が多そうなローマとかミラノなどの著名な町では、人間的に弱い私では日本語に埋没してしまうという危惧が残りました。そんなときに、一冊の書物に出会います。それが“**I gruppi politici romani nel III secolo a. C.**”（前3世紀におけるローマの政治派閥）という書物でした。大学院の博士課程のときです。読みながら、居ても立ってもおられずに、その著者**フィリッポ・カッソラ Filippo Càssola**先生に手紙を書き、そこで勉強したい旨を伝えました。その返事を受け取る前に、イタリアに飛んでいきました。そのときはイタリア語なんて全くできません。手紙も何とか英語で書きました。途中、ロンドンに立ち寄ったときに、不意にロンドン大学の**スクラード H. H. Scullard**先生から

宿泊先のホテルに突然電話がかかってきました。先生はそれこそローマ史の世界的な権威でした。それで少し話していると、カッソラ教授は素晴らしい人だから、トリエステ Trieste で一生懸命勉強しなさいと話してくださいました。本当はそのとき、スクラード教授から会いたいといわれたのですが、旅行中で正装も何もなく、渋々断念したのを覚えています。そのスクラード先生を紹介してくれたのが秀村先生でした。幾度か文通していたのです。その後イタリアでカッソラ先生からの承諾の手紙を受け取りました。場所はローマでもミラノでもなく、トリエステという当時の日本人には馴染みのない町でした。現在のスロヴェニアとの国境の町です。日本人はいません。つまり、イタリア語を使用しない限り、生き残ることができないという状況に自分を追い込みました。イタリアにしては、清楚で落ち着いた感じのいい町でした。オーストリア・ハプスブルク家のマリア・テレジア Maria Teresa の影響が色濃く残る、イタリア人にとっても行ってみたい町の一つです。さまざまな人々に助けられながら、ここで2年半生活をしました。カッソラ先生には、「歴史を研究するさいに、今までいろいろといわれていることを繰り返すというよりも、むしろ誰も手をつけていない真新しいこと、あるいは理論に着手することが大事だ」ということを言われました。先生が三人目でした。先生はあまりトリエステから動かなかったので、パリ大学のクロード・ニコレ Claude Nicolet 教授とか、ポリュビオス研究の第一人者であるリバプール大学のウォールバンク Walbank 教授、のちにサン・マリノ大学の学長をすることになったルチャーノ・カンフォラ Luciano Camfora 教授など、名だたる古代史の権威が次々にやって来たときでもありました⁽¹¹⁾。こうした教授と親交を深める場所にもカッソラ先生の好意で末席に加えていただきました。

トリエステ時代には、あれやこれやといろいろな人々に助けてもらい、質素な中にも何とか研究を全うしていました。養父母のような役割を果たしてくれたトリエステ大学の哲学科のステリオ・ゼッピ Stelio Zeppi 教授夫妻もその中にいました⁽¹²⁾。研究室は24時間好きなきに使用できるようにと専用の机と鍵までいただきました。その場所は新大学のある郊外ではなく、旧市街の Via dell'Università にあり、その建物の中に、古代史研究室、古代中世文献学研究室や考古学研究室など関わりのある研究室が小じんまりとで

すが、絵で整っていました。のちにカツソラ先生のあとを継ぐジーノ・バンデッリ Gino Bandelli 教授にもお世話になりましたし、古代後期の専門家ドメニコ・ヴェラ Domenico Vera とかパウラ・ボッテリ Paula Botteri など錚々たる若手、中堅が教えていました。その彼らと机を並べて勉強に没頭させていただきました。その中で、よく話をしていたのがマリオ・マルティーナ Mario Martina という若手の文献学者でした。彼とはさまざま議論をしましたが、残念なことに私が帰国したあと、繊細な彼は自殺をしてしまいます。その後、経済的な理由で南イタリアのターラント Taranto まで移動し、ここでも2年半過ごしました。ここで、イタリア語にさらに磨きをかけました。日本人がほとんど行かない南イタリアのカンパーニアからプーリア、バジリカータ、カラブリアを隈なく歩き回りました⁽¹³⁾。ハンニバルがだんだんと近づいてきていました。ハンニバルはイタリア遠征の大半を南イタリアで過ごしていました。圧巻はハンニバルがイタリア半島での戦いの中で唯一敗北を喫したと史料に記されている戦いのあったグルメントゥム Grumentum の近くにまで行くことができたことです⁽¹⁴⁾。

そして帰国後、今度は神戸大学の鈴木一州先生にお世話になりました。先生は私と対等な立場で話をしてくれました。私にとっては、四人目の恩師です。先生がとりあえず神戸大学に引き取ってくれました。そしてこちらに来るときに、土井正興先生を紹介してくれました。土井先生のおかげで、東京大学の古代史の会に誘われ、そこで村川先生の前で研究発表したこともありました。

このように恩師たちとの出会いに恵まれていました。しかし、研究は遅々として進みませんでしたが、多数の恩師に恵まれたことは、私にとって最大の宝です。ハンニバルが戦いに明け暮れたイタリア半島を北から南まで、その空気を感じ取ることができたのも、大きな成果でした。日本とは違い、歴史に対する考え方が真摯で、真実を追究していこうとする姿勢には襟を正すのに十分すぎるものでした。そして大学のアカデミックさは日本の大学で感じる以上のものでした。

註(6) 柳澤一博、『映画 100年 STORY まるかじり』朝日新聞社、1994年、6-7頁。

- (7) ソフォニスバに関しては、さほど有益な日本語情報はありませんが、服部伸六、『カルタゴ — 消えた商人の帝国 —』現代教養文庫、1987年、137-9頁に若干の記述があります。悲劇の女性として近現代までさまざまな方面で述べられてきました。当書ではソポニスベと綴られています。
- (8) そのときに利用したのが、Liddell & Scott, Greek-English Lexicon, Oxford や Lampe, A Patristic Greek Lexicon, Oxford という大型の辞典で、少しずつ単語の引き方に慣れていきました。
- (9) ギリシア語が関わってくると、dictionaryではなく、lexiconという言葉になることも、その頃理解しました。
- (10) その講義の中で言及された書物を次々と書店に注文していきました。その中で、半分ほどは入手困難なものでしたが、際立ったのは、de Sanctis, G., Storia dei Romani, Firenze の4巻8冊の書物でした。これでイタリアが近づいてきたのかもしれない。
- (11) 例えば、ニコレ教授の講演はフランス語なのですが、質問はイタリア語で、教授はフランス語で答えるという、私にとってはびっくりするものでした。本場の研究の凄さに圧倒されそうになります。カンフォラ教授とは話をする機会まで設けていただきました。私の研究に大きな手助けになりました。また、ミラノに行ったときには、カトリカ大学のマルタ・ソルデイ Marta Sordi 教授とも出会いました。カッソラ先生のもとで勉強しているというだけで、あちこちの大教授が会ってくれました。ポローニャ大学では碑文学の権威であるジャンカルロ・スジーニ Giancarlo Susini 教授に出会い、日がな一日研究室を拝借したこともありました。
- (12) 教授にはアンドレイナ令夫人と細々としたところまでお相手していただき、挙句の果てにはロック・クライミングの手ほどきまで受けました。
- (13) この頃、ふとしたことがきっかけで、多数の現地のイタリア人と交流を持つことができ、あちこちと遠出をしていたことが思い出されます。そのときに、南イタリアに残存している古代の遺跡を中心に見てまわったことを記憶しています。

- (14) 拙稿『グルメントゥム：その発掘の歴史』創価女子短期大学紀要 第42号、2011年、39-60頁；『グルメントゥム、その歴史を知るための文献史料解題』創価女子短期大学紀要 第43号、2012年、85-123頁になりました。

3. やっとハンニバル

ハンニバル・バルカ **Hannibal Barca** という名の姓にあたるバルカは皆さんよくご存知のバルセロナ **Barcelona** という町の名の由来になっていますし、カルタヘナ **Cartagena** というスペインの町は新カルタゴ **Carthago nova** という名に由来しています。映画の「羊たちの沈黙」や「ハンニバル」に登場するハンニバル・レクターとは関係ありません。

彼ハンニバル・バルカは北アフリカのカルタゴという古代フェニキア植民都市に生まれ、父親ハミルカル・バルカ **Hamilcar Barca** とともに、スペインに渡ります。父親のスペイン経営の中で育っていきます。もともと父親はハンニバルをスペインにまで連れて行きたくなかったのですが、彼が同行をせがむので、ローマに対する怨念を忘れることがなければ、という条件で当時まだ未開の地であったスペインに連れて行きます。父親亡き後、娘婿のハスドルバル **Hasdrubal** があとを継ぎますが、不慮の死を遂げ、ハンニバルが父親の意志を継ぐことになります。その時点から少し経って、ハンニバルはローマへの進軍を開始していきます。父親との約束を忘れていなかったのです。

大学の卒業論文も修士論文も、ハンニバルの母国カルタゴに関するものでした。ハンニバルを知るために、どんどんローマ史の中に入っていました。さらには、カルタゴのスペイン経営のあと、ローマがやって来たスペインのことについても研究しました。ハンニバルを知るために、地中海全域に話が広がって行きました。まだまだこれからもハンニバルを知るために、勉強を続けていく覚悟です。

さて、皆さんはハンニバルという名を聞いてもピンとこないかもしれませんが、あのローマが最も恐れたカルタゴの将軍で、ローマ人たちは子どもたちを静かにさせるために、**Hannibal ad portas**（ハンニバルが門のところまで

来ているよ)と言っただめたという逸話が残っています。それほどまでに、ローマ社会では認識されていたわけです。カルタゴというのは、今はなきフェニキアの築いた都市国家で、本国チュロス Tyros がアレクサンドロス大王に滅ぼされてからはフェニキア植民都市の盟主になっていきますが、結局三度に亘るローマとのポエニ戦争で地球上から抹殺されてしまいました。その二度目のポエニ戦争の主人公がハンニバルでした。イタリア半島では、ほぼ連戦連勝でした。そして最後、北アフリカに戻って、カルタゴ近くのザマ Zama というところでローマに屈してしまいます。しかし、不屈のハンニバルは、その後カルタゴ内部の政治改革に力を発揮し、膨大な戦後賠償金を支払う能力をカルタゴにつけさせたために、ローマから目の上の瘤のように思われ、追及されて、彼は東地中海に逃れていきます。彼の墓はトルコ、イスタンブールの海軍基地の中にあります。ハンニバルという人物名とともに、カルタゴという地名も理解しておかなければなりません。この都市は現在の北アフリカのチュニジアの首都チュニスに位置し、前 814 年に建国され、前 146 年にローマに滅ぼされます。カルト・ハダシュト Kart Hadashet、すなわち「新しい都市」という名に由来しています。その間、地中海、とりわけ西地中海に強大な商業圏を築き、最盛期を迎えましたが、台頭してきたローマとの一戦に敗れて姿を消していきます。そのカルタゴを扱った小説に、阿刀田高の『海の挽歌』という小説があります。地中海が日本でブームになっていく中で、近年カルタゴとかハンニバルに関する書物がたくさん出てきました。そのうちの一つがこの書物です。ここ十年、二十年ほどで関心度合が少し高まってきたのかな、という感じです。

さらに、ハンニバルと彼の永遠のライバルであった大スキピオ（スキピオ・アフリカヌス）との関係、ここには師弟の関係性が色濃く残っています。ボローニャ Bologna 大学のジョヴァンニ・ブリッツィ Giovanni Brizzi 教授の『Scipione e Annibale スキピオとハンニバル』という書物の巻頭にその話が出てきます。残念なことに、日本語の訳はありませんが。まさしく、師弟不二を連想させるような内容です。会ったことがあるとかないとかではなく、その精神性がどのように伝わっていったのかが大事ではないか、と語っています。教授は幼い頃からのその思いが古代地中海世界へと目を向けさせたと言っています。読書をする中で、このような感性が育まれていく可能性が高

いといえます。だから、一冊の良書に出会うことは人生を左右する大事な要素なのかもしれません。

また、ダヴィッド David という画家の描いた『ナポレオンのアルプス越え』という作品がありますが、東京富士美術館でも展示されていたことがあります。その絵画の中に、ハンニバルという名が消えかかりながら出てきます。アルプスを越えてイタリアに侵入したのは、ナポレオンの前にハンニバル、そしてシャルルマーニュ Charlesmagne という将軍です。いずれも時代の寵児だった人物です。このようにヨーロッパでは忘れられない歴史上の人物です。

ハンニバルに関する書物は数多く出ています。塩野七生の『ローマ人の物語』第2巻(新潮社、1993年)が『ハンニバル戦記』です。その中に、多数の文献が掲載されていますが、その後出版された書物の中で特筆すべきものを若干記しておきます。

Seibert, J., Forschungen zu Hannibal, Darmstadt, 1993.

Seibert, J., Hannibal, Darmstadt, 1993.

Lancel, S., Hannibal, Paris, 1995 [E. T. Oxford, 1998].

Hoyos, D., Hannibal's Dynasty, Power and Politics in the Western Mediterranean, 247-183 B.C., London & NY, 2003.

Hoyos, D., Hannibal, Rome's Greatest Enemy, Exeter, 2008.

などのほかに、前述したブリッツィ教授の多数の書物が存在しています。

むすびにかえて

私自身はハンニバルを追いかけていくうちに、そのハンニバル以上に大切なものを学ばせていただいたと確信しています。それはある面では語学の勉強だったり、ギリシア語やラテン語との格闘だったり、あるいは苦手な対人関係だったり、とさまざまな形で目の前に出てきました。ハンニバルの生まれ故郷のカルタゴ、現在のチュニスにも何度か行くことができました。よく行くカンパーニャ州のサレルノからは船便がありますが、近そうで、シチリアのパレルモで通関に数時間費やし、結局チュニスまで30時間ほどかかります。さまざまな書物と出会い、さまざまな人々と出会ったことが、ハンニバルを研究していく中で、自らに大きな栄養となって育まれていきました。

想像もしていなかったような出会いがあったことで、少しずつ対人恐怖症を克服していていることを実感しています。これがハンニバルを研究していく中で私が獲得した最大の成果だと思っています。今から思えば、トラシメネス湖畔の戦いの近くのベルージャに数ヶ月住んだり、カンネーの戦いの近くのバルレッタによく通ったのも幸運だったのかもしれませんが。

ここまでが表側の公式な話です。裏側の人間的な話はいずれ話す機会があるのでは、と思っています。本日は拙い話を時間をさいて聴いていただき本当にありがとうございました。やっと短大での講義が終わります。ありがとうございました。